「おとな」

坂東　美葉

登場人物

高橋　香

笠中　咲

店員

保険屋の男

宮城県の田舎町にあるカフェ。平日の昼時となれば、近所の奥様方が憩いの場所として集っている。雨に打たれる紫陽花を眺めながら、香はひとつ、ため息をついた。

店のドアが開く

咲　ごめん、遅れた。

と、咲が入ってくる。マタニティ服も板についてい、金髪だった髪の毛は流行りのボブに落ち着いている。

香　いいよ。心ちゃんは？

咲　今日は保育園。午前中検診あったからさ。

香　そうなんだ。何食べる？

と、メニューを覗き込む二人。

咲　香は？

香　ランチコースとチョコケーキ。咲は？

咲　揺るがないねー。うわ、ランチコース千五百円だっけか。んー、ここは我慢して、カプレーゼとミニパフェにしよ。すみませーん。

と、咲が店員を呼び、男の店員が来る

店員　ご注文は。

咲　えっと、ランチコースとチョコケーキ。あとカプレーゼ単品とミニパフェで。あ、全部一緒にお願いします。

店員　ランチコースのお飲み物は何になさいますか。

香　アイスカフェオレで。

店員　かしこまりました。

と、店員が去る。

香　節約？

咲　そうだよー。もうすぐこの子も産まれるし、家も建てたいし…。

香　夏が予定日だっけ。

咲　うん。ところで香の話って何？珍しいじゃん、香から誘ってくるの。

香　私、結婚決まったの。

咲　え！何よ急に。詳しく！

香　7月に入籍と式を済ませて、9月に新婚旅行。以上です。

咲　そうなんだーいつ決まったの？

香　先月かな。そこから一週間で両親に挨拶して、式場見てきて…。

咲　早…相変わらず。

香　いつものことでしょ。

と、二人笑う。

咲　で、式はいつ？呼んでくれるんでしょ？

香　元々する気なかったし、やるなら親族だけでいいかなって。

咲　えー！香の花嫁衣裳見たかったのに！

香　減るから遠慮しておく。

咲　もう。写真は見せてよね！あ、結婚に関しては私が先輩だから、何でも聞いて。

香　偉そう…でも、困ったときは頼むわ。

咲　香がとうとう結婚かぁ…感慨深いなぁ…。

香　近所のおばちゃんか。

咲　だって、仕事のほうが大切そうだったし、それに初恋の大志のことはもういいの？

香　今更何言ってんの。昔の話でしょ。

咲　えー、小学校から大学までちょいちょい聞いてたよ。しかも一昨年は東京まで二人で飲みに行ってたじゃない。

香　まあね…。

咲　十八年も片思いしてたじゃない。…間にちょこちょこ男の影はあったけど。

香　中学で玉砕してずっと避けてたのに、前

回の同級会で呆気なく話せてさ。

咲　そのままくっつくのかと思ってた。

香　何か違うんだよね。

咲　何が？

香　こんな人だったっけ？みたいな。

咲　何それ。

香　私の中の大志は中学から変わってないんだよ。将来は田舎でのびのびサッカーして暮らしたいって言ってたまま。

咲　子供の頃のままではいられないよ。もう私たちアラサーだよ？

香　うん。でも、東京でお金稼ぐために仕事してるんだって言う大志を見てさ、何かがっかりしちゃった。

咲　でも、あの頃のままの彼じゃ、今の香は満足できないでしょ。

香　そう！結局、中学生の私があの頃の大志を好きだったっていうのがわかったのよ。

咲　いつの間にか変わってたんだね。

と、香が頷く。店員が料理を運んでくる。

店員　お待たせしました。ごゆっくりお過ごしください。

と、店員が去る。

咲　久しぶりのパフェ！いただきます！

香　え、先にパフェ？

咲　心が出来てから、デザートは先に取られるから嬉しくて。

香　良いお母さんじゃん。エライ。

咲　本当は私だってパフェをお腹いっぱい食べたい時もあるんだよ。母親だって人間だもの。

香　みつを。

咲　私はさ、心産むまで母親って「母」っていう生き物のような気がしてた。

香　よくわかんない。

咲　お母さんはさ、私たちよりも早く起きて、遅く寝て、お世話をしてくれるのが当たり前って思ってた。いざその立場になっ

たら、とんでもないよ。

香　それはわかる。親って完璧で、何でも知ってると思ってた。

咲　でしょ？でも今の私を見てよ。人並みに悩むし、わからないことだらけだよ。

香　ある意味、お母さんって人間とみなしてなかったよね。

咲　悩みなんてなくて、疲れなくて、子供を一番に優先するのが普通って感じ。

香　サイボーグか。

咲　そんなロボットいたら欲しいわ。

と、パスタを食べ始める香。

咲　次期旦那はどんな人？外枠しか知らないんだけど。

香　日本人男性。

咲　めっちゃ外枠だわ。他に。

香　普通に地元で働いてて、趣味はインドア。

咲　お、香にしては普通だね。

香　何それ。でも、この人でいいのかな、今

でいいのかなって、一応悩んだよ。

咲　わかる。でもこればっかりは思い切りだよね。

香　あ、咲は保険ってどうしてる？

咲　何、藪から棒に。

香　結婚するからって、いくつか保険のパンフ貰ったんだけど、よくわかんなくて。

咲　ああー種類多いし、今必要？って感じだよね。

香　だからー。

と、スーツ姿の男が声をかけてくる。シャツは皺が刻まれ、目が泳いでいる。

保険屋　す、すみません。

香　はい？

保険屋　あ、あの…保険って聞こえたので…私、保険屋なんです。

咲　はぁ…

と、保険屋は二人に名刺を渡す。そして、

勝手に席に座る

保険屋　実は、今月一件も契約を取れないと、私クビになるんです！

香　嫌です。

保険屋　まだ何も言ってません！

香　契約してって言うんでしょ。

保険屋　その通りです、さすが香さん！

香　馴れ馴れしい。

咲　毎回こんな感じで声かけてるの？

保険屋　はい。でも何が悪いのか、入社して3年、一度も契約できなくて。

香　3年も…太っ腹な会社。

保険屋　正直、どうしたらいいのかわからなくて。

咲　仕事の仕方？

保険屋　ええ。学生時代は「卒業すれば仕事は出来るようになる」と。

咲　わかる！成人すれば常識が自動で頭に入ってくると思ってた！

保険屋　私も、保険の知識なんかは大人にな

れば、みんな知ってると思ってました

が、そうじゃないお客様ばかり…。

香　あなたは元々知ってたわけ？

保険屋　いいえ…新商品が次々出てきて…

香　正直すぎ。自分の商品もわからない人に

頼まないでしょ。

咲　いいじゃん、ちょっと聞いてみようよ。

香　咲はすぐそうやって…。駄目だよ、安易

に決めちゃ。

咲　だって可哀相じゃない。

保険屋　昔から不器用で…中身が成長しない

まま、年ばかり取ってる気がします。

咲　わかるわかる！

保険屋　保険屋の田中さんと呼ばれ、武彦君

のお父さんと呼ばれ、幼馴染の目尻

には皺が刻まれる。まるでパラレル

ワールドです。

咲　身体は確実に衰えてるよね。オールとか

出来ないもん。

保険屋　でも、まだ大学生気分も残っている。

咲　確かに。

保険屋　なのに、実際学生の集団に入ると、どうしようもなく居心地が悪い。

咲　そうそう！

保険屋　そこなんです！我々はまだ子供の心を持っている。その実そこに所属はできない。でも思い描く大人には手が届いてないんです。

香　じゃあ、人はいつ大人になるのよ。

咲　成人が「人に成る」だから、「大の大人は倍の四十歳かな。

と、三人考え込む。

保険屋　それは、今までの繰り返しですよね。

香・咲　え？

保険屋　子供の頃は、二十歳になったら。そして今は四十歳になったら。

香　悪戯に先延ばしにしているだけか。

咲　親になった時は…こんなだし。

と、自分を指す咲

香　社会人になった時は…こんなだし。

と、保険屋を指す香

保険屋　酷い、初対面なのに！

咲　でも、親になって実際にやらないと覚えないことといっぱいあったな。

香　聞いただけじゃね。

保険屋　人は身近に迫らないと、学ばない生き物なんですね。

香　何、急に。

保険屋　それですよ！体験して初めて自分のものになるんです。一休さんもその事を言いたかったんだ！

咲　ますます意味不明。

香　自分で苦労して身に着けていくしかないってことか。

保険屋　私の本質はゆっくりしか変われないんだ。でも社会人の私。父である私は様々な体験から鍛えられ、その社

会的立場という盾を幾重にも纏って
大人に見せていくのです！

香　どんどん自分の世界に入ってく。

咲　本質は大人にはなれなくて、ずっと追い
続けるんだね。

香　一生、理想の大人にはなれないのか。

保険屋　そして老人になったら一枚ずつその
盾を剥がされ、亀の速度で育てた本
質を問われるのだ。

と、保険屋の熱弁は続いている。それを見
て笑い合う香と咲。

咲　そこまでわかれば、もう契約はばっちり
取れるよ！

香　ありがとね。ご馳走様～。

と、保険屋の手に会計を押し付けて、二人
が店を立ち去る。

保険屋　ええ！

と、取り残される保険屋。外はすっきりと
青空がっている。
おわり